

役立つ・楽しい…… 大人にも有益な施設

【専門家の市民には……？】

「一般の」センスにふれる。研究を社会の中で相対化することができる。

科学に対する期待に広くこたえるスピリッツ

【科学館の当事者には……？】

内部の潜在的エネルギーを引き出し、のびのびとした活動を支援

科学館や他の施設・研究機関とのネットワークの形成
情報の階層化により、より深い科学情報の扱いを可能にする 得意分野の構築

これらを総合すると、人を介した交流が日常的に展開される「本当のハコモノ」としての科学館ということになるでしょうか。

プロジェクト報告 科学技術総合学習プロジェクト 2002年のスタートにあたり

科学技術総合学習プロジェクトリーダー 小寺昭彦

2002年。いよいよ新体制の土曜講座がスタートをきる。と同時に、4月からは総合的な学習の時間（以下「総合学習」と略す）のスタートでもある。昨今私は、学校教育に関わるが増えてきて、決して順調とはいえないながらも緊張感が高まってくる現場の気配を感じている。この様に先生方はもちろんのこと、総合学習に関わる多くの人の期待と不安が入り交じる中、本プロジェクトをどう進めていくべきかについては悩み多き年の初めとなった。

総合学習プロジェクトについては、一昨年の暮れの「21世紀の土曜講座を語る会」において、学校現場で科学技術社会教育に取り組みたいとの思いを持つ人間が盛り上がり、上半期に一気に走り出したプロジェクトである。プロジェクトの最終的な目標は、総合学習の時間に「先生が」使える科学技術社会教育のプログラムを、土曜講座が提供することであった。そこで一月より営業活動とプログラムづくりについて、前例のない試行錯誤を繰り返しながら四月に研究発表を行った。さらに一般を対象にテストを繰り返してきたところで壁にぶつかった。昨年の八月頃のことである。もっとも大きな問題は、私たち土曜講座の取り組んできたプログラムと、総合学習の授業という場に二つの点で大きく乖離があるということが顕現化してきたのだ。

一つめは、これまでの土曜講座のプログラムが広く市民全般を対象とするよりは、どちらかといえば関心がある人と一緒に研究をしようという中で進められてきたこ

とである。この点は本質的には素晴らしいことであるが、こと学校教育の場などで、いわば義務として授業に取り組む子ども（具体的には高校生以下であるが）を対象にするにあたっては、そのノウハウは十分ではなかった。もちろん一般向けの講演を数多くこなしてきた上田氏や優れたワークショップをつくる経験をもつ小林氏のスキルにより、これを修整することは決して不可能なことではない。しかし、それには十分に時間が必要である。この点に関しては、私たちがこれまでつくってきたプログラムが、多くは大人向けであったという点が更に問題を大きくしている。関心のない子どもに対して何らかの「気づき」を与えるプログラムの創出には、労力と時間と経験をつぎ込まねばならないと言うのが、昨年一年の正直な感想ではないだろうか。

もう一つのポイントは、総合教育の場、つまり相手中心である学校の授業に入っていくことの難しさである。これについては、一年かけてかなりその状況を理解したが、決して本質的な問題ではないだろうし、環境は好転しつつある。しかし、やはり時間をかけて実績とコミュニケーションを積み重ねて行くことは必要であろう。

ざっくばらんにいって、何とか今年四月の総合学習スタートに間に合わせようと力んでみたが、そんなに甘いモノではなかったといえれば良いだろうか？

そこで2002年。これからどうするのかである。一言で言えば、焦らず着実に進めようということである。最終的にめざすモノに対してのルートと階段をいくつか設定して、少しずつ成果を出していくこととしたい。まず、一つめのルートが関心を持つ子供に対する働きかけである。これに関しては、すでに上田氏が昨年「レガス」（新宿区主催の子供科学教室での電磁波の授業）などで精力的に取り組んでいるし、理科大の「サイエンス夢工房」（大学祭での科学実験ブース）もそうした場の一つであったらう。ぜひ、このような「場」をさがして、経験を蓄積していきたい。二つめのルートは、多くの人に働きかけるプログラムの検討である。昨年、小林氏がつくった「ワークショップ：21世紀の予言」（20世紀の科学技術の進歩を振り返り、科学技術社会の未来像を考えるワークショップ）のような、面白いプログラムをいくつか増やしていきたい。そして三つめのルートは、メンバーあるいはサポーターの補強である。昨年は当初のメンバー四名のまま、一年間を走り息切れした感がある。二つめまでのルートを通じて、このプロジェクトに関心を持つ人のネットワークを強化していくことが大事であろう。

具体的な動きのひとつには、科学館プロジェクトのプ

プログラム作りと連携をとり、ノウハウの共有、アイデアの交換をするといったことも視野に入れていきたい。道のりはまだまだ長く今年一年でゴールが見えてくるかは甚だ疑問である。しかし、他のプロジェクト同様に「土曜講座がやらずに誰がやる」という取り組みである。ぜひ、年末には何歩階段を上ったかを確認して、見守り支えて下さっている会員のみなさまにお伝えしたいと思っている。

プロジェクト報告 科学技術評価プロジェクト 市民の立場からの 科学技術評価を探る

科学技術評価プロジェクトリーダー 藤田康元

科学技術評価PJは昨年8月に誕生した新しいPJです。しかも、この半年にまだ三回しか会議をもったことがなく、ちょっとのんびりペースでやってきています。でも昨年12月、思いきって高木基金に助成金の申請書を出したこともあり、今年はより本格的に活動を展開していきたいと思っています。正式メンバーといえるのはいまのところ上田さん、尾内さん、藤田とちょっと少ないのが悩みの種です。この記事を読んで興味を持った方は、どうぞ遠慮無く御参加下さい。

さて、本PJはいったい何を目的に、具体的にはどんな活動をしているのか、以下、簡単に説明したいと思います。土曜講座リーフレットにもあるように、私たちの大きな目的は、「日本の科学技術政策とその具体的展開である研究開発プロジェクトに対し、市民の立場からどのように監視し、評価できるかを探る」こと、「民主的な開かれた意志決定がなされているのか、まっとうな研究開発目標が立てられているか、外部や内部からの評価がきちんとなされているか、無駄なお金が使われていないか、などについて市民として必要なチェックの原理と方法を明らかにする」こと、です。

政府が進める科学技術政策とか研究開発プロジェクトといえば、これまでも、例えば原子力分野のものは、その圧倒的な危険性ゆえに多くの市民から問題化され、批判されてきました。そういった取り組みが今後一層力をつけ、政策を大きく動かすものとなるべきなのはもちろんなのですが、私たちのPJはやや異なるところに目をつけました。私たちは、主たる調査対象を旧通商産業省（現経済産業省）を中心に進められてきた産業技術分野の特定のプロジェクトに絞り込むことにしました。さらに、具体的な取り組みとして、ひとまずはそのプロジェ

クトに対して経済産業省（旧通産省）の下で行われている・行われてきた評価委員会の活動を市民の立場で「評価する」という方法を採用することにしました。

私たちがすでに具体的な調査対象のひとつとして選んでいるのが「量子化機能素子」プロジェクトです。そのプロジェクトは1991年から2000年までの10年間に70億円を費やして行われたもので、従来のシリコン集積回路を遙かに越える超高速・超高機能の半導体集積回路の基礎となりうる量子化機能素子の開発を目指したものでした。ちょうど今、最終評価報告書の作成が進んでいるところです。私たちはこれまでに、その最終評価委員会を傍聴したり、そこで配布された資料を検討したり、かつて評価に関わった研究者からお話しを伺ったりといった作業を行ってきています。今後、具体的な調査対象とするプロジェクトを増やしていきたいと考えています。

特定の研究開発プロジェクトの評価の評価に加えて、本PJでは、文献の検討を通じた理論的な研究も同時に行ってゆく予定です。これは三つの領域に分かれます。第一に、これまでの科学技術政策論・産業政策論の検討です。特に、それら先行研究において、市民を主体とした民主的な意志決定・評価のあり方がいかに論じられているか・いないかを検討します。第二に、諸外国における民主的で多様な科学技術政策評価の制度作りの現状を把握し、日本での有効性を検討します。第三に、すでにダム建設などの公共事業に対してなされてきている市民の側からの監視・評価の試みを検討し、公共事業としての科学技術研究開発の場合に有効な視点や概念装置はあるか・ないかを検討します。

すべてまともにやろうとすればとても大きな問題であり、私たちの課題設定はちょっと欲張りの観もあるかもしれませんが、でも、着実に進めうる調査活動と同時に、それと連携した広い視野での理論研究も、初めに掲げた私たちの大きな目的にとって重要と考えています。

